

# 山と博物館

第43巻 第5号 1998年5月25日

大町山岳博物館



ハッチョウトンボ (メス)

撮影 清水 博文

雷鳥 (ライチョウ) について知りたい

荒沢 進

大町山岳博物館では日本でたった一カ所低地で雷鳥の飼育をして調査・研究をしている。一般的に雷鳥(ライチョウ)は、写真集や映像等によりその姿や生息環境等を知ることが出来る。そして、氷河期より生き残っている絶滅危惧種として、特別天然記念物に指定され、保護の対象になっている。登山をして幸いにも母子連れの姿に出逢えたことがあった方もおられるかも知れない。

大町山岳博物館では昭和35(一九六〇)年、富士山への移殖計画に協力・参加し、翌昭和36年、爺ヶ岳での150日に及ぶ調査活動以来、生態解明・生息環境調査・研究を現在まで38年間実施して来ている。

低地保護増殖事業については昭和41年より実施され、通年で一般者にもその姿を観察出来るようになって、隣接各県でも調査・研究活動が多数実施されて、特に富山県では昭和47年、立山での調査活動以来、現在まで大学関係者も信州大学をはじめにして協力いただき、多年に渡り進められて来た。調査・研究は雷鳥そのものに限らず、生息環境(高山・地形・地質・気象・雪・動物等々)の詳細に渡り、さらに歴史へまでも及ぶ広範囲なものである。

私も新生「山博友の会」が創立された昭和53(一九七八)年以来、20年間耳目はもとより、昭和60年に立山・室堂で富山県が実施した調査に参加し、各地で数回、高山での実態を観察することが出来た。調査・研究活動が多年に渡り実施されてはいるものの、「生息数が限られている」、「自然環境が厳しい」、加えて「調査・研究者が少ない」といった三重苦のような実状と、年々増加する観光客、それと同等の登山者が、保護すべき雷鳥とその生息環境に近づき踏み込み、平安・安全が脅かされ、十分な研究成果も得られないのも実状である。が、多年に渡る成果を私達にも知らせて欲しいものである。

雷鳥の生息する環境とその生態について、「山博友の会」活動20年の今年、山岳と雷鳥をテーマに、大町山岳博物館で何とか「集まる会」を実施していただきたい。3年後には雷鳥調査・研究の40年目となり、大町山岳博物館創立50周年にはシンポジウム、さらに雷鳥調査・研究関係のサミットが行われることを期待している。

(山岳博物館友の会会長 大町市在住)

# アルプスの風にのせて

中川 珠世

## ミヤマアズマギク

夏の青い空に向かってまっすぐに伸び、陽光に細い花びらをいっぱい広げて咲く、かわいらしいピンクの花を吹き渡る稜線の風がそっと撫でて行きました。細かい花びらが一斉に揺れるたび、並んで咲いていたコイワカガミの小さな花が、カサコソと楽しそうにささやいているようでした。



## キバナコマクサ

コマクサの咲く砂礫地に、仲良く並んで咲いていた小さな黄色のスミレの花を見つけました。いつもは上部の草地に咲く花が、風に

のってきたのでしよう。子馬の足の跡に似た葉の間から、お辞儀をしながらでてきた茎が、首をのびて花びらを広げます。

山道にしゃがんだ登山者が、寄り添うふたいろの花にレンズを向けました。すると、恥ずかしそうにうつむくコマクサの横で、黄色い花が今日は得意そうにしています。



## ハクサンチドリ

梅雨時のある日、山側の草付き斜面に顔を出したばかりの小さな芽を探しにゆきました。冬の間頑張り通した、いつもの顔ぶれがそこにあります。

陽のよく当たるその斜面を少し丈の高い草

が占領する夏。見上げる山道から、そこに咲いているはずのピンクの花を見つけられるのです。その花は太陽に近い夏の青い空へ飛び出たくて、茎のぐるりに千鳥が羽ばたく形の花をいくつも咲かせているのです。自然の作り出した芸術は、見飽きることはありません。



## コマクサ

鎮場の岩稜地帯にある山道脇のわずかな土の上に、驚くほど見事なコマクサの大株を見つけた日、「どうか、そっとしておいて。」と祈りました。

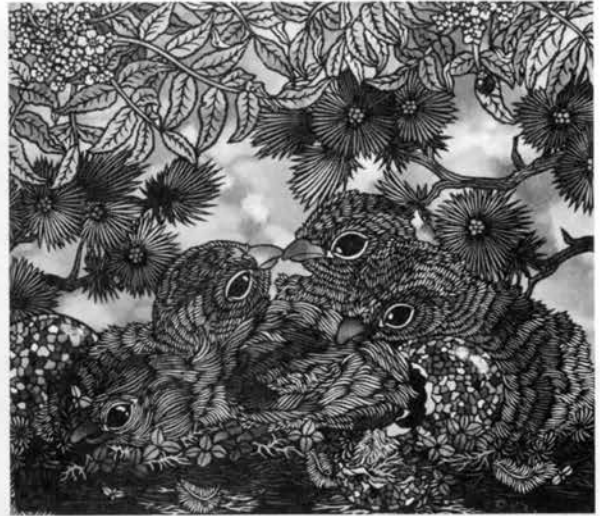
次の夏も、その次の夏も、その場所にコマクサは咲きませんでした。そして、三年後、その登山道から離れた岩場の斜面の下に、桃色の花を見つけたことは、今も私の心の中にしまっておりまます。「ニタツ。」

## チングルマ

雪溪の消え際に大群落をつくり、山の中腹から稜線までの山道を飾っています。淡いク



リム色の花が終わると、羽毛の実、そして真っ赤に染まる紅葉の順で、短い期間に三度のお色直しをします。こうして、秋の終わりにまで私たちを楽しませてくれるのです。



誕生の瞬間

ハイマツの葉と母鳥から抜け落ちた柔らかな羽毛が交ざりあう巣の中から、かすかな鳴き声がもれてきます。母鳥の暖かな腹羽根の下で、次々と小さな命が生まれ出る喜びの瞬間。羽毛がすっかり乾くまで、母鳥は腹羽根の下で暖め続けます。

稜線に張り出した鋭い岩の上に立ち、周囲の安全を見守り続けた父鳥が首を伸ばして、巣のあるウラジロナナカマドの木の下で小さなハイマツ帯を、そっと見下ろしていました。谷の下から吹き上げてくる冷たい風の中で、夕暮れ時の同じ岩上に凜として立つ父鳥の姿を、幾度となく目にしたことを思い出しました。

いちばん大切なもの

母鳥と雛鳥が囁や顔や体をふれあわせる姿をよく目にします。母鳥が雛に餌を与えているのではなく、親と子のコミュニケーションの手段なのです。そのしぐさを見ると、心がホッと温かくなります。

小さな雛鳥達が稜線の厳しい自然環境の中を生き抜いていくために、母鳥は持てる愛情のすべてをそそぎ、雛を育ててゆきます。母と子のふれあいの中で、小さな体いつばいに、溢れる程の愛情をうけるこの時期は、雛鳥達にとって最も幸せなひとときかもしれません。

山道を登りながら目にするこんな母と子の様子は、言葉にならない感動を幾度となく私に与えてくれました。

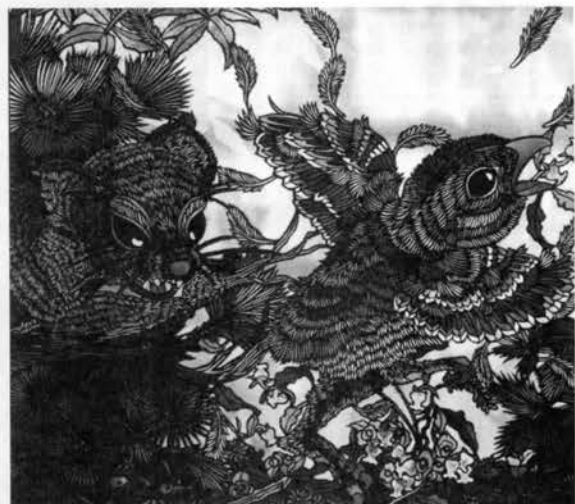


運命の日

山道でひと休みしていると、岩陰やハイマツの枝の間から、かわいらしい顔がちよこちよここと覗きます。雷鳥の雛にとっては、恐ろしい天敵のオコジヨです。そのかわいらしい顔を見ると、とても肉食の小動物とは思えない、愛らしさがあるのです。

稜線の岩だなの上に幾枚かの幼鳥の羽毛を見つけたとき、母鳥の愛情を持ってしても防ぐことのできない大自然の現実を噛みしめました。

雛鳥達は花や昆虫を食べて成長します。そして、この大自然の輪の中で、オコジヨ達もまた同様に、天敵から逃れながら子育てをし、生きていくための糧を求めているのです。そのことを考えながら、悲しい運命の瞬間は、大自然の至る所で日々繰り返されていた



のだという、複雑な思いでその場をあとにしました。

花の揺れるひだまりで

日の出と同時に動き始める山人達が、次の目的地へ向けて出発してしまったり、静かな山道の砂地で、母鳥が砂浴びを始めました。体を砂にこすりつける母鳥にならない、羽の中に入りこんだ小さな虫などをとりながら、幼鳥達も次々と砂地に体を横たえます。

小さな体が小刻みに動くたびに、膨らんだ幼い羽毛がフワフワと揺れて、細かい砂が周囲に飛び散っていました。吹き渡るゆるやかな稜線の風は高山の花々を優しくながら通り過ぎて行きます。暖かな日だまりの中で、雛幼鳥の小さな赤い肉冠だけがちよっぴりほこらしそうに見えました。



コマクサとイワヒバリ  
長く厳しい冬を耐え抜いた高山の生きとし生けるもの全てが躍動する季節です。雪解けが遅れた年には、雪の消え際から一斉に高山植物が咲き揃い、夏と秋口の花々が同時に稜線を彩ることも珍しくありません。  
コマクサが可憐な桃色の花を一面に咲かせた砂礫地の岩に、高く澄んだうた声を風にのせる一羽のイワヒバリがとまっています。あの小さな体の一体どこからでてるのか、アルプスの短い夏の幕開けを祝うような素晴らしいうた声でした。



夏の最後を彩って  
山の秋はかけ足でやってきます。夏山のおわりを彩るタカネマツムシソウが、淡い紫色で斜面を覆っているのが、山腹の登山道から見下ろされました。  
幅の狭い、急峻な山道を下りて行く、両側の斜面に咲くハクサンシヤジンの小さな紫のつりがねが鼻先に揺れて、さながらお花畑に行く、山の小さな生き物になれるのです。足元の自然を見上げていたら、丈の高い花の頭すれすれを、イワヒバリが音もなく飛んで行きました。あまりに見事な低空飛行に、自らの身を守ることの難しさを考えた瞬間です。

アルプスの名ガイド若鳥の肖像  
県境の稜線を西に東に移動する雷鳥の親子にいつも出会う場所がありました。母鳥の連れ歩く雛の数が、日に日に減っていくことに気づいた日。せめて最後の一羽が無事に育つことを願った夏もありました。  
秋の深まる頃、稜線を下りた雷鳥達が驚く程の群をなし闊歩する姿を見ることができました。登山道を横断してゆく、その一群に道を譲るのも山のルール。親しい山仲間にあいさつをかわす気持ちです。その列の中に、無事若鳥へと成長した雷鳥達を見つけたとき、これから訪れる長く厳しい雪山をたくましく生き抜いてほしいと願わずにはいられませんでした。

(白馬村在住の切り絵画家、中川珠世さんによる企画展「北アルプスの風にのせて」中川珠世切り絵展」を五月二十三日(土)から六月二十日(日)まで、山岳博物館、教室において開催いたします。  
入場料は無料です。)

## お知らせ

### 人事異動

四月一日付で岑村隆学芸員が教育委員会文化財係へ転出、関悟志学芸員が新規採用されました。また臨時職員の大田一夫さん、宮澤寿長さんが退職、尾曾史子さんが水道課へ転出、宮本尚



子さん、横澤志津さん、倉間友恵さんが着任しました。

山と博物館 第43巻 第5号  
発行 一九九八年五月二十五日発行  
〒長野県大町市大字大町八〇五六―一  
大町山岳博物館  
TEL 〇二六―一三三―〇二二一  
印刷 大糸タイムス印刷部  
定価 年額 一、五〇〇円(送料共)(切手不可)  
郵便振替口座番号 〇〇四〇七―三三九三